

ポルトガルが襲ったコールファッカンの町壁 —アラブ首長国連邦オマーン湾岸の中世港町、2018年—

佐々木達夫 金沢大学名誉教授

Town Wall of Khorfakkan Attacked by Portugal: Medieval Port Town along the Oman Gulf, UAE, 2018

SASAKI, Tatsuo Professor Emeritus, Kanazawa University

1. 中世港町コールファッカンの町壁調査

コールファッカン湾内の港がアラビア半島東南部でもっとも優れていたと伝えられ、2つの湾内は風を遮り船舶の停泊に適し、飲み水が湧く場所としても知られる。中世の港湾施設や貿易の研究に適した港町遺跡である。

1994年に砦を踏査し、2001年から6年間ほどコールファッカン町の発掘調査を行い、隣接地の砦発掘と測量を実施した。2018年7月から2019年の1月にかけてコールファッカン古町の町壁を探る調査を行い、北側が海に面する町の陸側・南側の町壁を160mと、農園と境を接する西側の町壁を発掘した。東側は現在、調査中である。

中世コールファッカン町を考える資料として、これまでポルトガルの記録が使用された。今回の町壁発見はコールファッカン古町の理解を地元から深める資料として有意義である。

2. 町壁はどこにあったか

古い町や市は通常、石や泥レンガで積まれた高く幅広く硬い囲い込み壁で防御されている。アラビア湾やオマーン湾岸の海岸地域では、内陸側からの攻撃を防ぐため、町壁跡は一般的に町の陸地側に見られ、港や海側は開けたままで壁がない。町壁には少なくとも1つの門があり、そこから町内に入出入りする。コールファッカン古町地域はワディによって地形的に東西の2つの地域に分けられる。14世紀から16世紀に栄えて人口が多かった東地区はさらに東区と西区に分けられる。ワディに沿った地域すなわち西地域と東地域西区は灌漑システムによって豊かな農園になっていたと思われる。

ポルトガル人 Duarte Barbosa は16世紀に町壁が存在すると記している。コールファッカン三角形砦図には町壁が描かれていない。ポルトガル砦の背景として、砦の周りに広がるナツメヤシ畑のなかに小さなア



図1 コールファッカン古町地区

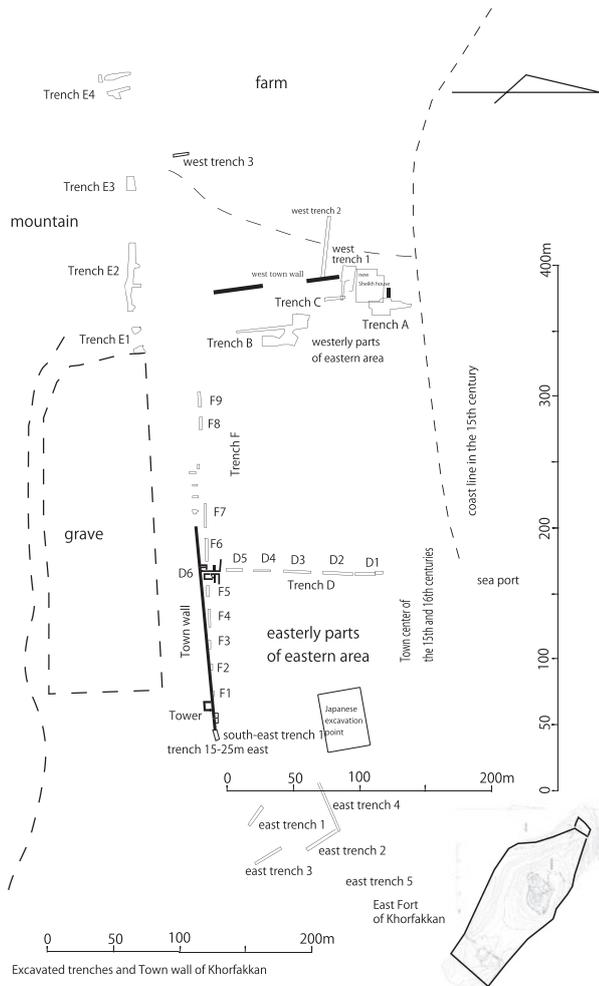


図2 発見された町壁

リーシュが散在している様子が描かれている。通常、村と農園は分けられて家と畑が混じらないので、この有名な図は証拠に基づいて正確に描かれたとは思えない。

3. 町壁の探査と町の変遷

コールファッカンに町壁の痕跡が残るかどうか、具体的な物的証拠はなかった。しかし、海岸に沿って建設された町の陸地側に、東西方向に町壁が延びると推定できる。当該地域のアラブ港町は海に向かって開け、内陸の部族や近隣の村による襲撃を防御するため、陸地側が壁によって強化された。そうであれば、海から山際まで長い南北トレンチを掘れば町壁が探せると推測できた。

西地域ではポルトガル砦付近で9世紀のアッパース朝陶器片が数点採集されている。14世紀から16世紀の陶磁器は以前の発掘で東西両地域から発見されているが、西地域の出土量は東地域と比べてかなり少ない。



図3 南側の町壁



図4 南側の町壁と塔

16世紀初めのポルトガルによるコールファッカン侵攻後、東地域に住んだ人々は非常に少なくなったのだろう。17世紀と18世紀のコールファッカン人口は不明瞭である。東地域の日本隊発掘地点では、20世紀より前で16世紀より後の居住層位が1つ発見された。20世紀より前に東地域に人々が住んだことは確かである。1935年の航空写真を見れば、東地域東区にはシェイク家以外に家がないことが明らかである。1935年あるいは1945年に多くの人々がイランから東地域東区に移住して家を建てた。地元に住むその子孫から当時の様子を聞いている。20世紀後半に再びこの地は充実した町になった。

我々は今回の発掘調査で2本の町壁ラインを発見した。古町の背後の山際近くに延びる160mほどの東西方向の南側町壁と、東地域西区の南北方向の町壁である。南北方向の町壁は建物によって破壊された部分が多く、4つに分かれて発見された。存在が予想された東地域東区の町壁は、5本のトレンチを設定して探したが発見できなかった。すでに開発工事によって町壁も削平されたと思われる。

町壁は両側面を大きな石で平坦に造り、内側は同様



図5 南側町壁発掘風景

の大きな石とやや小さな石を詰める。基礎石は溝などを掘らずに、砂上に直接置かれている。町壁の幅は1.4~1.5mの部分、2.0mの部分が多いが、1.8m、2.2m、2.5mの部分も見られる。方形塔が一基、町壁外側に接して発見された。壁石は多くの場所で1個のみが残るが、いくつかの場所では最も高い部分で3個の石が3層となって残る。石積技術は東砦の石囲い外壁の積上げ技術と類似している。

古町の南側では町壁の位置と幅を確認するため、多くの短いトレンチを町壁両側に設定し、トレンチは町石壁底のレベル、砂層の表面まで掘った。町壁両側の砂層から陶磁器が出土した。多くの施釉陶磁器はイラン製であり、緑釉陶器赤色硬質素地鉢、白濁釉陶器黄色素地碗、紫釉陶器赤色素地鉢、それに加えて多量の無釉イラン土器がある。オマーンあるいはサウジアラビア産の褐釉陶器ピンク/灰色素地もあり、それは鉢が一般的であるが碗と瓶も少しある。中国陶磁器は青磁と青花があるが僅かである。青磁は碗と盤、青花は主に碗で盤は少ない。ミャンマー青磁盤は多い。ベトナム灰釉陶器碗が僅かな量ある。イラン製の彩画陶器や珪石素地陶器は僅かである。

これらの出土品は町壁の年代を推定する補助となる。陶磁器は14~16世紀の製品で、多くは15世紀後半から16世紀前半と推定される。この時期が町壁が存在して機能した時代である。町石壁の下には灰色砂層がある。このことは、出土陶磁器からコールファッカンが東地域において14世紀から発展したこと、町が15世紀に拡大したこと、16世紀前半にポルトガル侵攻と同時に砂層上に町壁が造営されたことを想定させる。ポルトガルが彼らの砦を西地域に建造した17世紀初頭には、古町と町壁は既に廃虚となっていた。



図6 南西の町壁

南側町石壁と東砦囲い石壁は大きな割った石を積み上げている。割石積内に泥や砂のモルタルは見られない部分がある。南側町壁に接する方形塔の壁は、石積内に赤色土をモルタルとして使う。南西区域の町壁は石積内に細かな石灰粒が混じる泥をモルタルとして使う。海岸に近い町壁部分は石積内に赤色土をモルタルに使う。赤色土も石灰粒を含む泥も、いずれも近くの山にある土である。

4. 町壁の年代とポルトガルとの関係

町壁発見を目的に古町全域にトレンチを設定したが、それは15~16世紀のコールファッカン古町の範囲と広がり进行を明らかにすることにもなった。家々と陶磁器等の出土品は古町中心部の周辺や外側では量が少なく、人々が居住した同じ灰色砂層も中心部地域と比べると周辺部では薄くなる。そうしたことは、15~16世紀の町中心部がどこにあったか、当時の町が今想像するよりも小さかったことも示している。墓地地域も現在の範囲より小さく、少し古町に近かったことが推定できる。トレンチF7とF8では墓石が町壁の下となる部分から発見され、トレンチF6、E1a、E2では内部で墓石が発見された。いずれも現在の墓地に近い場所である。

1515年、Duarte Barbosaはコールファッカンは果樹園と農園が多い村であると記している。オランダ船の航海日誌でMeerkatは、ポルトガル砦と別砦が小さな湾に位置し、200軒の小さな家々が海岸近くにナツメヤシ枝葉で建てられていたと述べている。Meerkatの航海日誌にはナツメヤシ以外にイチジクの木、メロン、スイカ、ガム樹脂の木が記されている。また、いくつかの井戸があり、水質の良い新鮮な水が灌漑に



図7 北西の町壁

使われたと記している。

1623年、オマーン・シェイクの支配下にあったペルシア海軍はコールファッカンに侵攻したが、ポルトガルの反撃に直面し、砦に撤退した。ペルシアが追放されると、ポルトガルの指揮官 Rui Freire はコールファッカン住民に対してポルトガルの王冠に忠実に留まるように促し、ポルトガルの税関事務所を設立した。

1737年、ポルトガル人がこの地域から追放されてから後のこと、コールファッカンがオマーン内戦への介入中に、ペルシア人はオランダの援助を得て5,000人ほどと1,580頭の馬でコールファッカンを再侵略した。1765年、コールファッカンはシャルジャの支配者シェイク・アル・カワシム家に属していたことが、ドイツ人旅行家 Carsten Niebuhr によって記録されている。



図8 シェイク家跡と町壁

コールファッカン東地域東区では、17世紀初頭にアジアやヨーロッパで一般的に発見される中国陶磁器青花が発掘されず、19世紀に世界各地で使われた中国陶磁器青花もきわめて少数が採集された以外には、いずれも発掘されていない。これは、その当時に当該地にほとんど住民がいなかったことを推測させ、その当時の町壁は存在しなかったことを示している。

■参考文献

- ・佐々木達夫・佐々木花江, 2010「炉とゴミ穴ーアラブ首長国連邦の中世遺跡出土例の紹介ー」『金沢大学考古学紀要』31: 44-105.
- ・佐々木達夫・佐々木花江, 2008「コールファッカンの砦と町跡の発掘調査概要」『金沢大学考古学紀要』29: 60-175.
- ・佐々木達夫・佐々木花江, 2006「ポルトガルが襲った中世港町遺跡ーコールファッカンの発掘2001~2005年」『第13回西アジア発掘調査報告会報告集』80-84.